

(要約版)

## 江戸時代ロシア漂流者の記録にみる嗜好品文化の研究

江口泰生 (岡山大学)

駒走昭二 (神奈川大学)

久保菌愛 (愛知県立大学)

### 1. 研究目的

江戸時代にロシアへ漂流した者がある。彼らはさまざまな記録を遺した。(A)ロシアの地で遺した資料、(B)日本に帰国して書き留められた資料である。

(A)には次のようなものがある。ロシアにおける日本語教育のために作成されている。

(1) 薩摩漂流民ゴンザ関係資料(鹿児島)……薩摩から出航し遭難。ロシアで辞書・文法書・会話教科書・百科事典などを遺した。

(2) アンドレイ・タタリノフ(Андрей Татаринов、1752?~?)関係資料(青森下北)……下北佐井から出航し、遭難。その船員三之助の息子三八(ロシア名がアンドレイ・タタリノフ)が語彙集を遺した。

(3) ニコライ・レザノフ(Николай Резанов、1764~1807)関係資料(仙台石巻)……仙台から出航し遭難。善六などの言葉をレザノフが辞書・日本語教科書などにまとめた。

(B)には以下のようなものが代表的である。ロシアへ漂流し、ロシアから日本へ帰国した者からの聞き取り調査に基づいている。

石巻漂流民への調査記録『環海異聞』

大黒屋光太夫への調査記録『北槎聞略』

これらの中に、煙草や酒などの嗜好品に関する記述がある。江戸時代に日本人が予期せぬ事情でロシアへ渡ったとき、ロシアの文化とどのように接するのか、嗜好品とどのように接するのだろうか。さらに具体的に述べると、江戸時代の日本人がはじめてワイン、ビール、ウォトカに接した時に、それらを日本の酒の語彙とどのように対応させたのだろうか。その感想は極めて直感的であるがゆえに、さまざまな酒類に接した現代人とは違って、むしろ本質をついているのではなかろうか。

また江戸時代の日本人がロシアの煙草や煙草文化に触れた時に、どのように日本語に対

応させたのだろうか。

本研究は前掲の、特に (A) - (1)、(A) - (2)、(B) を利用し、これらに記録されている江戸時代の嗜好品の具体例、嗜好品への意識や嗜好品を取り巻く文化、関連する語彙について考察する。これによって、江戸時代の日本人がロシアの酒類や煙草文化についてどのように感じて、どのように翻訳したのか、日本の文化とどのように対応させたか、を明らかにすることによって、江戸時代の嗜好品文化を明らかにしようとした。

## 2. 研究方法

鹿児島県立図書館所蔵マイクロフィルムや九州大学所蔵写真や筆者の入手した資料などと (A) - (1) 江口泰生・駒走昭二訳『世界図絵』、江口泰生・米重文樹訳『友好会話手本集』、(A) - (2) 江口泰生訳『レクシコン』、(B) を参照して用例を抜き出し、分類整理して、ロシアの酒をどのように日本語に訳したか、ロシアの煙草類をどのように日本語に訳したかを解明する。またそれらの比較からロシアの酒と日本の酒の対応を明らかにする。

## 3. 研究成果

薩摩方言を反映するゴンザ資料、青森下北方言を反映するタタリノフ資料にみられる嗜好品について対訳を中心に考察した。その結果は次のようなものである。

(1) ゴンザ資料では「酒」「甘酒」「焼酎」「泡盛」というように多様な酒の種類が見つかったが、タタリノフ資料では「酒」「濁り酒」「諸白」といった、日本酒の枠内にかぎられた語彙が見つかっただけであった。これは当時の地域性を反映したものかと思われる。

(2) また現代の鹿児島で「酒」といえば焼酎を指すが、18世紀の鹿児島では「酒」は「日本酒」を指していた。古くは日本酒が無標で「酒」、焼酎が有標で「焼酎」と呼ばれたのに対し、現代では焼酎が無標の「酒」、日本酒が有標で「日本酒」と呼ばれる、というように関係が逆転したようである。九州北部では「酒」といえば「日本酒」を指するのが普通である。したがって、「酒＝日本酒」が古い語彙体系であったと思われる。この「酒＝日本酒」体系は、18世紀以降に鹿児島で「焼酎」が一般的になり、大いに普及したことによって「酒＝焼酎」体系へと転換していったものと思われる。

(3) 青森下北方言を反映する『レクシコン』では、「ウオトカ」に「諸白」、「ワイン」には「酒」、「ビール」には「濁り酒」という訳があてられていた。

(4) 18世紀において、薩隅方言と青森下北方言においてワインに日本酒が対応させられていることが明らかとなった。現在、日本酒を海外展開する方向の一つとして、ワインの味に似せるという方向があると思われるが、ワインと日本酒が似ている、という直感は既に18世紀の日本人にも存在していたと思われる。ゴンザ資料ではウオトカに「泡盛」が対応させられていることもあわせて興味深い。

(5) ビールに「甘酒」「濁り酒」が対応させられていた。このことから、18世紀のロシアのビールが甘く濁ったものであったことがわかる。特に「甘酒」と訳してあることは、ロシアでは近年までビールを清涼飲料水として扱っていたことを想起させる。清涼飲料水という点では「甘酒」と同様である。

(6) 『レクシコン』の喫煙関係の語彙を調査した結果、「噛み煙草」に「カド」(身欠きにしん＝(乾燥させたニシン)の訳があててあった。「噛み煙草」は日本に普及していなかったためか、味の共通点より口に含む行為の共通点がほうが目立ったのであろう。西洋において、火気厳禁の船内では「噛み煙草」が用いられていたと思われる。

(7) また18世紀のロシアの船員の間では煙草が「壊血病」への薬効があると考えられていたと思われる。

(8) ギヤマン煙管に相当する「ビズギリ」という語が青森下北方言に存在したことがわかった。ただし、これが日常品なのか、贅沢品なのか、商業品なのかは不明である。今後の課題である。